日本におけるキリスト教の土着化

芦名　定道

「28:16　さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。17 そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。18 イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。19 だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、20　あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（マタイ）

＜内容＞

１．問題――なぜ土着化か
２．日本キリスト教と土着化あるいは土着化論
３．土着化論の問題点
４．土着化と信仰の生活化――平安教会の問題として

＜アウトライン・ポイント＞

１．問題――なぜ土着化か

１．キリスト教は、これまで多様な地域・文化・民族の中に土着化してきた。
　キリスト教（西欧キリスト教とそれに連なるキリスト教）が現在の形になったのは、古代のローマ帝国の領域内に展開し、中世ヨーロッパ世界に浸透する歴史的プロセスにおいてである。この西欧キリスト教の形成過程で生じたことは、キリスト教のギリシャ・ローマ文化への土着化、ゲルマン民族への土着化そのものである。
　　↓
　土着化なしには、キリスト教という宗教は存在しなかった。

２．日本では？
　宣教 150 年、しかし、人口の１％未満。→日本キリスト教がなぜ日本に土着化できないのかについては、繰り返し問われてきた（日本キリスト教の土着化論）。
cf. 古代ギリシャ・ローマでは、公認までに 250 年。
ゲルマン民族への正統教会の定着には、300 年。

３．日本におけるクリスマスの定着は、キリスト教の土着化と言えるか？
　　この事態は、明治のキリスト者植村正久がすでに問題にしていた。

２．日本キリスト教と土着化あるいは土着化論

４．制度的文化的に（冠婚葬祭など）、思想的に、倫理的に、高度に発達した宗教文化の存在。仏教国日本。

５．都市に偏在する教会。　→　都市の教養層を中心とした布教。
しかし、若者が教会に定着しない傾向は、大正時代より、問題化していた。卒業クリスチャン。

６．「キリスト教の私事化、内面化は避けられなかった」「キリスト教を近代日本形成の精神的基盤とする考え方は、キリスト教が天皇制国家に忠実な宗教ということで落着して

いった。それと並行して、キリスト教は個人の内面的煩悶や葛藤を解決する精神的指針や人生観を提供する宗教となっていった」、「青少年時代にキリスト教に入信した場合、大人になり、社会に出たとき、キリスト教も卒業する信徒があらわれた。」（土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、229頁）

７．伝統的な宗教文化を軽視する傾向。御利益、迷信、偶像。
　地域文化から遊離した教会。生活の実感が希薄なキリスト教。

３．土着化論の問題点

８．日本における土着化で問われるべき、日本の伝統的宗教文化は、日本キリスト教の外部にある対象ではない。
日本のキリスト教は、制度はアメリカ、思想はドイツ、心情は日本（古屋安雄）。
↓
土着化において問われているのは、日本のキリスト教自体である。

９．土着化はキリスト教の目的か？
・土着化は目的ではなく、宣教の結果、あるいは成果である。
・どこに土着化するのか？
武士か？　民衆か？（民衆とは誰か）　→　地方教会の状況をどのように見るか。
明治半ば以降、日本のキリスト教は農村と地方を切り捨ててこなかったか。
（工藤英一『日本キリスト教社会系経済史研究　明治前期を中心として』新教出版社）
↓
日本のキリスト教は、どこに根付こうとしているのか？

10. 土着化は、単純な伝統文化肯定論ではない。土着化が健全に行われるには、伝統批判・対決が欠かせない。伝統の抑圧性とキリスト教の解放性。

４．土着化と信仰の生活化――平安教会の問題として

11. 再度、土着化とは？
　おおげさな理論の話ではなく、信仰を生活化するという信仰自体の基本に関わる問題として理解するべき。

12. 生活化しないキリスト教からは、卒業クリスチャンが生まれる。
生活自体（日常的な生活そのもの）に不可欠な中心としての信仰となっているか。
日曜日だけ、頭の中だけ？　→　地域の祭り、葬儀の問題。

13. 土着化は、自分の生活の場を、信仰の観点から点検することから始まる。
↓
地域を知らない教会が、どうして地域に根ざすことができるのか。

14. この 30 年の間に、平安教会に奉仕した外国人宣教師の努力を、教会は、教会員はどのように評価し、どのように継承・継続しようとしてきたのか。
・フェリー宣教師の岩倉地域調査。
・金度亨宣教師のエリコ・プロジェクト。
↓

問い直すべきことは、多くあるのではないか。

15. 平安愛児園後のビジョンは？
平安教会という場で問われているのは、この意味での土着化ではないか。

＜文献引用＞

Ａ．京都学派との対話・対論が問題とされる際に、その背景に存在するのは、宗教的多元性の状況である――「宗教の多元性というものが、神学者の側からも自明的なものとして認められつつある現代の宗教的情況」、「今日、キリスト教と仏教と対話・交流が重要な意味をもつと考えられている」（武藤、99 頁）――。「従来日本のキリスト教会もキリスト教信徒も」（同書、31 頁）一般的に無関心であるもかかわらず、宗教的多元性はもはや無視できないとの意識が高まりつつあることも否定できないであろう。それが、「キリスト教の土着化」「福音の土着化」の問題であり、それゆえ、「禅とキリスト教が相触れ合う点」や「東洋的ないし大乗仏教的無の思想とのつながり」は、日本におけるキリスト教思想形成の中心的課題の一つと言わねばならない。なぜなら、「われわれ日本人キリスト教徒にとっては、日本の伝統的諸宗教は、われわれの生い立った文化の外にあるのではなく、却って、われわれ自身の最も深い内面的形成要素をなすといわねばならない」（同書、69 頁）からである。京都学派との対話・対論の意義は、これがこのような土着化をキリスト教が実践的に追求する上での不可欠の理論的基盤となることが期待できるという点に認められる。「京都学派とキリスト教」というテーマの意義は、宗教的多元性のもとでの土着化論という文脈あるいは展望に立つときに、より明瞭なものとなると言えよう。（芦名、2010）

Ｂ．「以上に言及した神学者らの思想にとって、アジアの宗教としての仏教は、単にキリスト教の「外にある他者」ではなく、彼らの信仰にとって「内なる他者」であった」、「アジアのキリスト者にとって他宗教との対話は、自分の信仰の奥深いところから響き出る「内なる他者」の声を傾聴することからはじまる」、「アジアのキリスト者にとって他宗教との対話とは、自分の中の他者を発見し、自分の信仰の奥底を掘り起こす作業に当たる」。（金、2006）

＜参考文献＞

１．芦名定道
・「日韓キリスト教神学と土着化――民族をめぐって」、『福音と世界』2007.7、新教出版社、2007 年、pp.51-58。
・「『アジアのキリスト教』研究に向けて――序論的考察」、『アジア・キリスト教・多元性』（現代キリスト教思想研究会）第８号、2010 年、pp.79-104。
http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christ/asia/journals/asia8asina.pdf
・「京都学派とキリスト教――現状と展望」、『福音と世界』2010.10、新教出版社、pp. 30-35。
・「日本的霊性とキリスト教――キリスト教土着化論との連関で」、『北陸宗教文化』第24号、北陸宗教文化学会、2011年3月（予定）。
２．武藤一雄『神学的・宗教哲学的論集 III』創文社。
３．金承哲「アジアの宗教的多元性とキリスト教――日本キリスト教における他宗教との対話を手がかりにして」、芦名定道編『比較宗教学への招待――東アジアの視点から』晃洋書房、2006 年、144-167 頁。